マルティン・ズーター

『知りすぎたガンザー（Ⅱ）』

訳　大谷　一葉

ガンザーはまるで催眠術にかかっているかのようにシャイヴィラーさん夫妻のダブルベッドの前に立っていて、枕の上にあるピンク色のブタちゃんのぬいぐるみをじっと見つめている。そのぬいぐるみは、まるでもう長いこと洗濯機にお目にかかっていないかのようである。いや、もしかすると全くお目にかかったことがないのかもしれない。

彼の名前がガンザーの役職レベルよりも上にあって、ガンザーと同じ役職レベルの者達の間では気を遣って憚られるような声で話に出てくるような男性が、ただピンク色のブタちゃんのぬいぐるみを抱きしめてベッドで一緒に寝るのみならず、また彼の夫人にそれを洗うのも禁じた、ということもあり得るのだろうか。

それにもかかわらずシャイヴィラー夫人がぬいぐるみを洗ったならば、シャイヴィラーさんは彼女に対して激しく文句を言うだろうか。もしかして、時々彼が全く休めていないように見えるのは、一晩中世界経済に対する不安に追い詰められているからではなくて、ぬいぐるみの清潔さの度合いについて夫人と一晩中言い合いをしているから……という可能性も。

ガンザーの体は緊張でこわばっている。シャイヴィラーさんのピンク色のブタちゃんのぬいぐるみには名前もついているという可能性はあるだろうか。その名前はブーちゃん？プンプンちゃん？くるくるしっぽちゃん？やはり彼はこのように想像せざるを得ないだろうか。つまり、夫婦喧嘩の際に

ブーちゃんはシャイヴィラーさんの慣れ親しんだ匂いではなく、家庭用洗剤の香りがしている、と。

シャイヴィラーさん夫妻と彼らの客は居間で食後のコーヒーを飲んでいる。彼らのいる部屋からわざとらしい笑い声が聞こえ、ガンザーの気を散らす。もしかすると、自分は思い違いをしているのかもしれない。それは、ブタちゃんが置いてあるのはシャイヴィラーさんのベッドの方ではないかもしれない、ということだ。

しかし、ベッドサイドのテーブルに目をやることでこの期待は打ち砕かれるのである。――ガンザーのCEOが就寝前に『フラウミットヘルツ（思いやりのある女性）』と『グリュックポスト（幸せの便り）』[1] を読んでいるという想像は、シャイヴィラーさんに対する尊敬の念の回復にはほとんど役立たない。

それはきっと、ガンザーが上司の最低最悪の側面を発見したことである。つまり彼は、シャイヴィラーさんに対する尊敬の念を喪失したのだ。これからガンザーがシャイヴィラーさんを思い浮かべる時には、必ずピンク色のブタちゃんのぬいぐるみも一緒に思い出すだろう。この尊敬の念の喪失によって、今後役員会のメンバーに対してシャイヴィラーさんが恐ろしい形相で怒鳴っている時には必ず、彼がブーちゃんを腕に抱いて親指をしゃぶっている様子をガンザーは思い浮かべることになる。そして海外出張の時、シャイヴィラーさんはいつもプンプンちゃんを抱き、セキュリティーチェックに引っかからないように祈っていることだろう。

このことを知っているという負担を抱えながら自分はこれからもいつも通りでいられるのだろうか、とガンザーは自問自答してみる。果たして彼は、会社の中にくるくるしっぽちゃんの秘密を知る何者かがいるということを、決して、そう生涯決してシャイヴィラーさんに知られないよう配慮するという使命を遂行できるだろうか。

ちょうど彼が、ニコニコ笑っているブタちゃんのぬいぐるみから目を離すことに成功した時、彼の後ろでシャイヴィラーさんの声が聞こえてくる。

訳　大谷　一葉

「トイレのドアはもうひとつ隣だ」

Martin Suter, “Ganser weiß zuviel (II)”, S. 57–58, in: ders., Unter Freunden und andere Geschichten aus der Business Class, Zürich: Diogenes, 2008, (detebe 23724)

注

1 『フラウミットヘルツ（思いやりのある女性）』と『グリュックポスト（幸せの便り）』どちらも女性向けゴシップ誌の名前。